

サンプル文献

タイトル:Effectiveness of Mechanical Thrombectomy Using the Penumbra System for Acute Ischemic Stroke Due to Large Vessel Occlusion

■本文からの 400-600 字の構造化抄録

【背景・目的】主幹動脈閉塞による急性期脳梗塞例に対する Penumbra system(PS)を用いた血栓回収療法の有効性について検討した。

【方法】2012 年 1 月～2015 年に PS による血栓回収療法が実施された脳梗塞 43 例(女性 24 例、平均年齢 76.6 歳)を対象とした。治療終了時の TICI scale 2b/3 を良好な再開通、退院時または発症 3 ヶ月後の mRS スコア 0-2 を転帰良好と定義した。

【結果】発症から来院までの時間は中央値 63 分、来院から rt-PA 開始まで 61 分、発症から再開通まで 263 分、動脈穿刺から再開通までは 73 分であった。良好な再開通は 62.8%、転帰良好は 30.2%であった。治療合併症は 14.0%に認められた。転帰良好を予測する因子は治療前 MRI における DWI-ASPECTS、動脈穿刺から再開通までの時間、良好な再開通を予測する因子は発症から動脈穿刺までの時間であった。手技では ADAPT 導入前後の比較において、導入後に手技時間が短縮され再開通率が上昇していた。また、第一世代 MAX シリーズ・5MAX -ACE の各世代の比較ではデバイスの進歩に伴い手技に要した時間の短縮、再開通率および転帰の改善がみられた。

【結論】PS を用いた血栓回収療法では虚血範囲、手技に要した時間が転帰に関与していた。また、治療時間の短縮、再開通率および転帰の改善にはデバイスの改良および ADAPT 導入の関与が示唆された。

■本文からの 400-600 字の非構造化抄録

主幹動脈閉塞による急性期脳梗塞例に対する Penumbra system(PS)を用いた血栓回収療法の有効性について検討した。2012 年 1 月～2015 年に PS による血栓回収療法が実施された脳梗塞 43 例(女性 24 例、平均年齢 76.6 歳)を対象とした。治療終了時の TICI scale 2b/3 を良好な再開通、退院時または発症 3 ヶ月後の mRS スコア 0-2 を転帰良好と定義した。その結果、発症から来院までの時間は中央値 63 分、来院から rt-PA 開始まで 61 分、発症から再開通まで 263 分、動脈穿刺から再開通までは 73 分であった。良好な再開通は 62.8%、転帰良好は 30.2%、治療合併症は 14.0%に認められた。転帰良好を予測する因子は治療前 MRI における DWI-ASPECTS、動脈穿刺から再開通までの時間、良好な再開通を予測する因子は発症から動脈穿刺までの時間であった。手技では ADAPT 導入前後の比較において、導入後に手技時間が短縮され再開通率が上昇していた。PS を用いた血栓回収療法では虚血範囲、手技に要した時間が転帰に関与していた。また、治療時間の短縮、再開通率および転帰の改善にはデバイスの改良および ADAPT 導入の関与が示唆された。

タイトル:Final results of a phase 1b study of the safety and efficacy of the PI3K δ inhibitor acalisib (GS-9820) in relapsed/refractory lymphoid malignancies

■本文からの 600-800 字の構造化抄録

再発・難治性リンパ系腫瘍に対する PI3K δ 阻害剤「acalisib(GS-9820)」の安全性および有効性検討のための第 1b 相試験の最終結果

【背景・目的】acalisib は、ホスファチジルイノシトール 3-キナーゼ(PI3K) δ に対して高い選択性を有する第 2 世代 PI3K δ 阻害剤である。再発性リンパ系腫瘍患者を対象に、acalisib 単剤療法の非盲検、用量漸増・用量拡大、第 1b 相試験を実施し、acalisib の臨床的活性および安全性を評価した。

【方法】再発性リンパ系腫瘍患者 39 例を登録した。用量設定コホートでは acalisib を 50～400mg の 4 段階の用量で 1 日 2 回経口投与した。用量拡大コホートでは acalisib 400mg を 1 日 2 回経口投与し、有効性および安全性を評価した。主要評価項目は、評価した用量範囲内での最大耐量(MTD)とした。副次的評価項目は用量制限毒性(DLT)、有効性、安全性プロファイルとした。

【結果】38 例に acalisib が投与された。DLT は認められず、MTD は同定されなかった。用量拡大コホート(29 例)における治療期間中央値 5.8 ヶ月時点での全奏効率(ORR)は 41.4%、無増悪生存期間(PFS)中央値は 8.2 ヶ月であった。acalisib と関連のある治療下で発現した有害事象(TEAE)は 30 例(78.9%)で認められた。そのうち、Grade3 以上の TEAE は 21 例(55.3%)であった。頻度の高い TEAE は、下痢、発疹、トランスアミナーゼ値の上昇、感染症であった。死亡に至った有害事象(AE)は 9 例(23.7%)で認められた。

【結論】acalisib は再発性リンパ系腫瘍患者において臨床的活性を示した。また、顕著な TEAE は acalisib 独自のドラッグエフェクトではなく、PI3K δ 阻害剤のクラスエフェクトであることが示唆された。(ClinicalTrials.gov 登録番号 NCT01705847)

■本文からの 200 字の非構造化抄録

再発・難治性リンパ系腫瘍に対する PI3K δ 阻害剤「acalisib(GS-9820)」の安全性および有効性を検討する第 1b 相試験の最終結果

再発性リンパ系腫瘍患者における acalisib の臨床的活性および安全性を評価するため、acalisib 単剤療法の非盲検、用量漸増・用量拡大、第 1b 相試験を実施した。主要評価項目は acalisib の最大耐量(MTD)とした。その結果、評価した用量範囲内において用量制限毒性は認められず、MTD は同定されなかった。acalisib は再発リンパ系悪性腫瘍患者において、臨床的活性を示した。